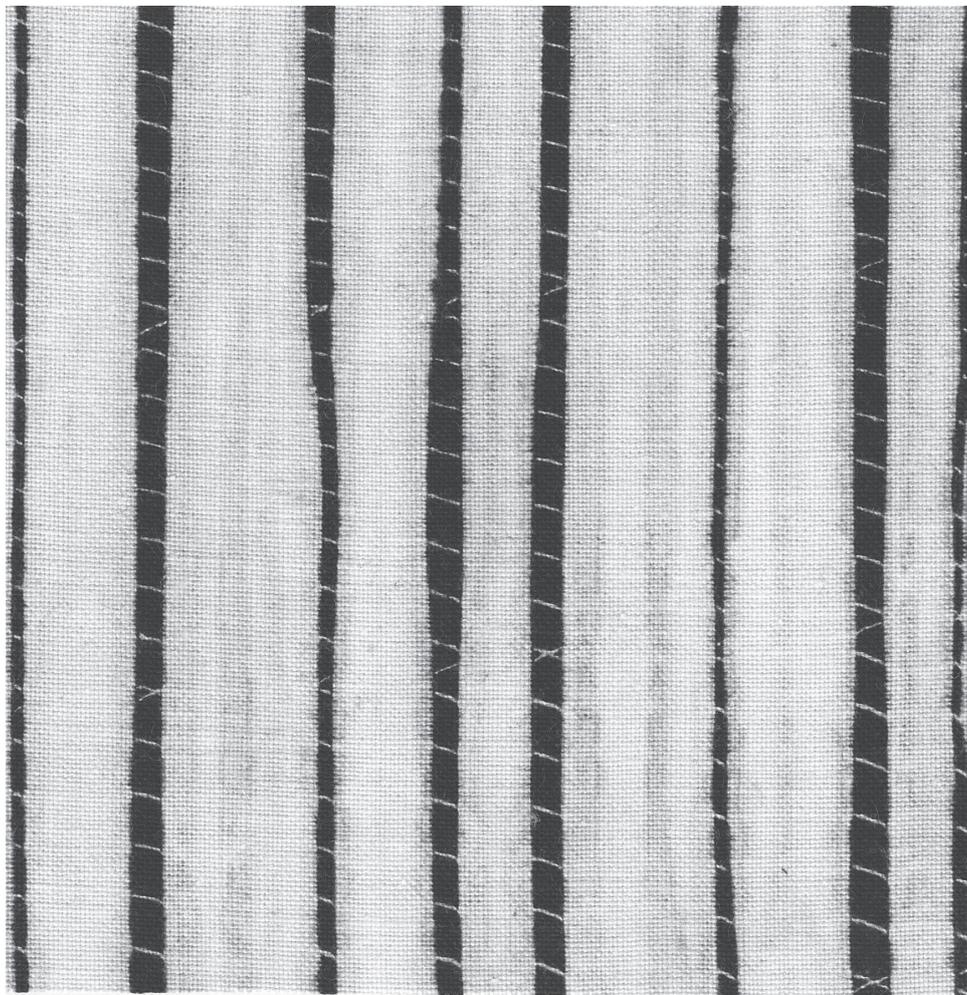


～思いを伝えて70号～

# 有松

NO. 70 有松まちづくりの会



◇松文筋絞り

直径約13センチ長さ20センチの2個の丸太からなり片方の丸太の先端は円錐型に突き出し、もう1本の丸太の先端は同じ形か凹型に彫り込まれ、この2本の丸太の凸部と凹部には放射状の溝が40本彫られ、凸部を凹部に差し込むとぴったり合いその間に生地を差し込み絞ります。

解説：竹田 嘉兵衛

# 有松 重要伝統的建造物群保存地区

## 選定に何かつて

有松まちづくりの会副会長 竹田 嘉兵衛

平成二十三年五月二十三日に有松まちづく

りの会重伝建推進委員会と名古屋市の歴史まちづくり推進室とが合同で伝建地区制度の勉強会を始めてから、既に三年近くが過ぎてい

ます。有松は日本のまちづくり運動の発祥の地でもありますので、名古屋市職員の真摯な研究とご努力とがあいまって、この委員会での重伝建地区制度への理解は大変早く、かつ完璧に近いものであったと考えています。

平成二十三年九月二十六日までに五回の勉強会を終え、平成二十四年六月十日には名古屋市による住民への「町並み保存と調査に関する説明会」が開かれ、平成二十四年六月から平成二十五年三月にかけて名古屋市立大学の溝口先生をリーダーとする調査委員会が、三十五件の建造物の実測調査を、さらに平成二十五

年に追加の十件の調査を終えました。

平成二十五年八月十九日名古屋市により町内会を通しての第一回の住民に対する「有松町並み保存地区の現状と課題についての説明会」、そして十二月十日に第二回の説明会が開かれました。そしてこの三月には、名古屋市により具体的な条件を示して有松地区重伝建への道筋を示されました。

今後私たちは重伝建を通してどのような町をつくりたいか、そしてそれを継続可能なものにするにはどうしたら良いかについてしっかりと考え、行政と手を組んで実行可能な計画を立てねばなりません。

継続的にこの美しい町並みを維持するには修理をつづけることが出来る経済的な裏付けが必要です。京都の花見小路や東京の銀座のように人が集まる町をどうつくっていくか、そ

れには美しい町並みや店をつくるだけでは無く、そこで魅了的なものが売られ、また楽しいイベントが開かれ、さらにおもてなしとしての素晴らしい接客が必要です。

今一度江戸時代の有松をかえりみれば、将軍や大名達さえび立ち寄っていいこうという町をつくり、また素晴らしいおもてなしをしてきたのです。どうしてそんなことが出来たのかも一度この本質を考えれば、かつて東海道一の名産有松絞りを売る東海道一美しい町有松は再び過去の栄光を現代に発信する素晴らしい町をつくりあげていくこともできると信じて頑張りたいものです。



切り絵「有松の町並み（竹田家）」

豊田信行

# 有松天満社文嶺講と町づくり

有松天満社文嶺講総代長 藤枝 静次

有松東海道の無電柱化工事も終わり、絞りと古い町並みの歴史景観が生かされた東海道を山車が曳行される姿は、大変風情があり、有松の祭りにふさわしい呼び物です。

ご承知のように有松地区の氏神様は、天満社文嶺に祀られ、神廟が祇園寺から寺僧出端<sup>でん</sup>によって後ろの山に開基、数千人より捧げし詩歌・文章などを山頂に埋め、文政七年（二八二四年）元の神廟を基に八棟造りの社殿を建造、以前の百倍の廟となり、有信莫大な資材の寄付により文章嶺と称し、ここに独特な祭礼が発達しました。

有松祭の主役は、昔は桶狭間の神明社参拝の關係で傘鉾・馬之頭であったが、明治時代に三町に揃えられた山車が主役となりました。山車にはそれぞれ他に類を見ない要件が備わっており、昭和四十八年名古屋市文化財として指定されています。

その山車や祭りはかつて資産家・オオヤという絞り問屋や中老衆が大半の費用を出し合って行っていました。書物によると「中老は氏神様秋季祭礼に於ける萬般の指図を司り、

併せて諸費用を負担するものとする」と記され、隔世の感がし、良い時代があったものだと思います。

また昔は各種団体、子供連、若者連、中老、青年学校、年寄連などがかわり、芝居や相撲も行われていました。

戦後GHQの指令で天満社氏子組織が文嶺講として公的に成立し、祭礼や山車等の管理運営を行うようになっていきます。

名古屋市に合併した昭和三十九年、文嶺講は規約の改正を行い、組織の再編が行われ、現在は有松・東丘・太子学区の氏子から構成されています。昨今、町名も境界も変わり、内容やかかる費用も大幅に変わり、伝統を守り維持・運営して行くのに苦慮しております。諸行事も一月の元旦祭から三月の中旬、十月の例大祭までは、各種の神事催事があり、近年初詣や新入学、進学、就職等の祈願の方々が大勢参拝され賑わっています。特に秋の大祭の昼部は神様が地域の安寧を祈り行幸され、夜は衣替えし、山車に提灯、笛、太鼓、囃子、鳴り物入りで盛大に祭りを催します。町内の

皆様はもとより近郊近在の人々にも祭りに大勢参加していただき、賑わいと感動と喜びを分かちあいたいと思います。

私どもは、例大祭は元より各種の行事ができる体制をつくり、組織団体として、できる限りの協力を惜しみません。先人の築いた文化や伝統、資産を守り大いに活用します。

有松東海道の町並み、電柱や電線の無い街道、往時の旅人の姿を演出し、三輦の山車と役者の揃った行列、で町中賑わいを満喫してみましよう。

有松山車祭を「魅せる」祭りとして大いにPRし、まちづくりの一端を担えれば私どもは幸いです。今後ともご支援をよろしくお願いたします。



切り絵「有松山車まつり（中町）」

豊田信行

# 思い出すままに 町並みと絞りと藍

有松まちづくりの会 参与 山田 峯夫

梅花の膨らみにつれて日ごとやわらかさを

増していく陽光の温かさ心躍る春に向けて、

歴史的な遺産の町並みと有松絞りを身近に暮らすこの町に、会報「有松」が創刊されたのは、

昭和五十八年春三月だった。当時は予算も少

なくタイプ印刷の第一号は、故竹田嘉兵衛前

会長の「有松の将来についての私案」と総会

の報告が記載され、選任された役員名簿を見

るとその多くの方が黄泉の人となられ、時の

流れを痛感する。爾来三十有余年、有松の町

並み保存は住民の皆さんの温かいご理解によ

り進められ、この度「有松」も通巻七十号を

発行することが出来ましたことは、偏に編集

に携われる方々のご努力の賜物と厚く敬意を

表し、創刊初期に拙い編集発行をさせていた

だいた筆者として感無量である。

有松の町並みから電柱が消え、青藍の空が

澄み広がるなか、慶長年間の開村以来四百

余年幾多の変遷はあれど、町並みは保存され

有松絞りの伝統も藍と共に受け継がれて来た。

青でもなく紺色でもない、世界からジャパン

ブルーと称される藍である。有松絞りを彩り、

昔から人々に親しまれてきた藍は有松の色で

ある。何度も藍鹽に布を浸し空気に当てるこ

とを繰り返すことよって藍色に染まるので

あるが、古くから欧州などの染色にも影響を

与えた日本古来の色である。

沸き上り爆ぜてまた沸く黄の気泡

藍の情と吾もまた思う

藍は地上最古の染料といわれるが、天平

時代には貴族たちがすでに衣服に着用してお

り、鎌倉時代になると武士が濃い藍色を「勝

色」と呼び好んで着たので武士の色としても

広まったと聞く。

吹き霧らう春浅き日や瀬を覆う

染め上げし衣の藍青美しく

有松絞りの創業以来、絞商は各店の屋敷内に藍の染場を作り染色をしていたが、商いが繁盛し需要に対応出来ず染色を専業とする染工場が独立し、紺屋と言われる様になった。

藍染場崩れ壁の間より

差し入るひかりの照らし出す春

太古の昔から人間はいつも碧い空、海や湖

の水面の碧を見て生活して来た。そして日本

人は水色、空色、浅葱色、紺色などさまざま

な青い色の名を表して来た。江戸時代に農民

や庶民の衣服はほとんどこの藍木綿であった。

深深と響み伴う藍の香を

風運び去り春昏れてゆく

「藍は愛」と言う。心やさしく建てれば美

しい色に答えてくれる。目に身体に纏っても

優しく伝統と町並みを守っていく有松の色で

ある。

日本の染織文化の華として有松絞りは永久

に受け継がれ、歴史的な町並みが、服部会長

始め関係者の多年の願望である有松地区を国

の重要伝統的建造物群保存地区に一日も早く

選定されることを祈りながら筆を置く。



# 有松への視線

名古屋工業大学大学院准教授

是澤 紀子

このたび、地域に住まう人々のご理解とご協力のもと、二〇一二年から二年をかけて名古屋市が実施した調査（愛知工業大学・名古屋市立大学・名古屋工業大学による合同調査）を契機として、有松の町並み全体をさまざまな角度から知る機会に恵まれました。ここでは、注目されがちな歴史的建築物という



西町の水路にみる切石積の石垣



玉石積と切石積の石垣

よりも、それらによる町並みの「連なり」を支えている有形、無形の資産から、有松の魅力の一端に触れてみたいと思います。

建築物の足元に目を向けてみると、土地の造成にも歴史が刻まれています。たとえば、写真のような水路の石積み。これと同じような石積みは、建築物の基礎など、あちらこ

らに点在していることをご存知の方も多いでしょう。興味深いことに、建築物の調査によって建てられた時期がわかってくると、その基礎となっている石積みが存在した時期がわかり、別の場所にある同じような石積みが、いつ頃の人々の営みであったのだろうか、思いを巡らせることができるのです。町並みを「読む」楽しみの一つです。歴史あるまちの文脈を知る手がかりは、思わぬ所に潜んでいるものです。

町並みは、そこでの生活や生業、祭りなどの無形の文化に支えられてきたわけですが、



有松絞りまつりの風景（2012）



有松天満社秋季大祭の風景 (2012)

有松では、なんといっても「有松絞りまつり」と「有松天満社秋季大祭」による祭りの文化が、町並みを継承する力となっているように思います。その歴史をみても、江戸時代から近代にかけて、天満社の祭りを担っていた「中老衆」という共同体がありました。それは近代の道路改修や線路敷設などに取り組んだ「有松絞共進会」という絞り産業の共同体としての一面をもっていたことが知られています。祭りや絞り産業をめぐる幾多の共同体のもとで、まちづくりが連綿と進められてきたのではないかと。産業と信仰という無形の文化

が、町並みという有形のものを通して体感できるからこそ、町並みが継承されてきたと思います。すし、今後も継承されていくのではないのでしょうか。

「有松絞りまつり」の様子をみると、古絵図に描かれた店構えの風景を彷彿とさせます。かつての日常の風景が、現在の非日常の風景のなかに再現されているのです。また「有松天満社秋季大祭」では、山車の曳行にとどまらず、囃子込みという形で、有松とかわりの深い桶狭間や鳴海を巡ってゆく。こうした縁ある地域との共同体意識を育みなが



「ええところ」探しワークショップの風景 (2013)

ら、維持していく仕組みを築いてきたのであろうと思います。そのような意味で、町並みの継承のために祭りがもたらす効果は大きいといえるでしょう。有松の文脈を継承していくための重要なツールとなっているのです。

昨年の師走に、名古屋工業大学大学院産業戦略工学専攻の授業の一環として、有松あないびとの会と名古屋市のご協力を得ながら、地域に学ぶ「ええところ」を探して散策しました。4つのグループに分かれて、それぞれの魅力をもとめると、伝統的に手入れされてきた建築物や庭はもろろのこと、それらがベースとして尊重されつつも、年月を経ている中で、ガス灯や郵便ポスト、看板等の細部にまで、さまざまな時代の日常生活が重なっていることを感じさせる町並みの重層性、いわば懐の深さに感銘した参加者が大半でした。ただ歴史があることに魅力を感じるのではなく、歴史のなかに日々の生活と営みが積み重なっていることを体感できる時、心地よさを感じるのではないのでしょうか。ある時代というのではなく、今日までの変化をみせる懐の深さを保ちつつ、共有財を育んでいってほしいと思います。

# 鎌研場の話

名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期課程

河村 瑛子

江戸時代中ごろの古地図『鳴海名所八景和歌 織田今川古戦場図』に「有松村」を見つけた。本図は、当時の鳴海周辺の絵地図に桶狭間合戦の布陣を書き込んだもので、古歌や名所旧跡など関連記事をも収録している。有松の条には次のようにある。

信長公おけはぎまへむかひまたふ時、草  
苺の鎌をときてありけるに、所の名をと  
ひたまへば、「手越と申所なり」とこた  
へけり。それより、手越・かまとぎばと  
いふ田所の名となれり。

（『郷土古絵図資料叢刊第二編』所収）

桶狭間へ進軍中の信長が、鎌を研いでいた草苺に道を尋ねたところ、「手越」と答えたという伝説が田地名の由来譚として記されている。地元の人間ならば、一人の邂逅した「かまとぎ場」が、有松天満社の南、手越川辺の「鎌研」を指すことに直ちに思い至るであろう。たしかに、そこは鎌研ぎの作業に適した水辺であった。

総じて、地名は、ある場所を他と区別するための普通名詞であることが多い。「かまとぎ場」も、農民が日常的に鎌研ぎの作業に利用したこと由来する呼称であり、それは全

国の水辺の土地に「鎌研」という地名があることから明らかである。つまり、地名とは単なる標識ではなく、文化そのものなのである。

平成二十一年、鳴海町字鎌研の一部をはじめ、有松町大字有松字往還北、同橋東北など旧東海道沿いの地名が一括して「有松」に変更されたことは記憶に新しい。旧地名の一部は抹消され、多くは「有松」の区域外に追いやられた。これらの地名がかつて「有松」の一部であったことは、このまま放置すれば、五十年後、百年後には忘れ去られるに違いない。

物は風化し、記憶の口承には限界がある。そうして文化がひとたび断絶すると、古態は永久に失われてしまう。こうした過去の消失に抗する術は、究極には書物、すなわち文字を現代人の都合で改変することが、その土地にまつわる文化や歴史を捨て去る暴挙であることに、我々はもう少し自覚的になる必要があるのではないか。

いま我々に出来ることは、まず、町に伝存する記憶を、当地の諸兄の力を借りて委細漏

らさず書き留めること（本会報は既にその一端をなしている）、そして、古人の残した書物を通して、過去をきちんと知ることである。江戸時代に作られた書物のうち、活字化されたものは僅か一パーセントと言われる。この一パーセントを踏まえるのは当然として、人の目に触れにくい残り九十九パーセントの世界を尊重する、少なくとも、そうしようと努力する意識は、真に歴史的・文化的なまちづくりを可能にする。過去を生きた人々の志を重んじること、それこそが、有松という歴史ある町が将来にわたって存続する上で肝要な姿勢なのではなからうか。



『鳴海名所八景和歌 織田今川古戦場図』（部分）

## 第30回有松絞りまつり

第30回有松絞りまつり実行委員会 催事部 山上 正晃

「今年、有松絞りまつりは30回目を迎えます。30年間の謝恩の集大成として、ここちよい空間、やさしい時間、そしてふれあう人間。肌触りのよい有松絞りらしく、このまちは一人ひとりのまごころで皆様をつつみます。共感できる思い、記憶を染める情景、それが有松にしかできないおもてなしスタイルです。」

この文は、第30回有松絞りまつりのタイトル趣旨です。お客様、地元の皆様に感謝をこめて、また実行委員のみんなが楽しく30回目の絞りまつりを過ごせるように、有松でしかできないスタイルを、イベントを通して表現できればと意気込んでおります。

### 第30回有松絞りまつり

◆六月七日(土)・八日(日)

テーマ

『有松本物主義』

しぼりにつまれて

しまつり開催三十年目の

おもてなし

今回は、街道全体を装飾して、まさに“しぼりにつまれて”を表現したいと考えております。絞り染色の原点となる藍染め色をふんだんに使い、街全体をインディゴブルーに染め上げれば、その空間は、有松絞りらしい優しさや、品格ある風景をお客様はじめ、皆さんにご提供できるはずです。

装飾の中心は旧山田薬局様にご協力をいただき、街道に面した部分を全体的に絞り生地で覆う装飾をさせていただくこととなりました。伝統的建造物は有松の宝！過去からの贈り物であり、これからも伝えていきたい未来への贈り物でもあります。この宝物をラッピングして過去から未来へ繋げていこうという意味を含めています。実行委員が共同作業で1つの大きな絞り生地を製作し、建造物自体をシンボルインスタレーションに作り上げます。

旧山田薬局内では、藍染め製品の展示を行います。一つは、昨年全国の小学校で夏の課題図書となった“有松の庄九郎”を題材に、

ストーリーに合わせた製品展示をします。最初に庄九郎が出会った絞りの着物とはどんな着物であったのか。また、初めて庄九郎が作った手拭いはどんな柄だったのか。話しの中の製品を現実には作り上げます。そのほか、竹田嘉兵衛商店様が保存する歴史ある貴重な藍染め製品をお借りし、町家の空間を活かした展示を行います。歴史と文化に溢れた町並みをお客様、地元の方々が改めてじっくり見ただけのような企画していきます。

昨今では絞りワークショップもかなりレベルが上がってきました。上がったと言っても技術的なものではありません。初心者にはそれなりの、上級者にはさらに踏み込んだ、そのレベルにあった絞り教室を用意できるようにしました。ちゃんと教えられた通りの柄を作り上げなくても良いのです！自分の感性で、デザイン重視の作品を作っていただけのような会場内の東エリア、西エリアに配置されています。

山車のお囃子を聞きながら、楽しいお買い物、楽しいワークショップ体験、そしてじっくりと町並みにも目を移していただき、充実した1日をここ有松で過ごしていただきたいと思えます。

## 見どころろたつぷり 秋のひととき

十一月十六日から十八日にわたり、有松東海道一帯で「晩秋の有松を楽しむ会」がありました。

大村知事・河村市長は十七日に有松を訪れ、お二人は弥次さん喜多さんのような旅人の装いで絞会館から竹田邸まで歩かれました。絞り小町やあいち戦国姫隊も加わり、東海道は大いに賑わいました。

期間中、有松の各場所で行ういろいろなイベントが開催されました。

いけばな展では、町並みの軒下や町家・土蔵の室内でいけばなが展示されました。いけばなによって、それぞれの町家は華やかに彩られました。

今回は文化財指定の町家等の一般公開もありました。竹田邸では「本藍染絞着物展」が開かれました。第十四代將軍徳川家茂が訪れた茶室も含めての公開となり、多くの方が説明をうけながらじっくりとご覧になっていました。「有松で楽しむお抹茶」は竹田邸茶室と、まどか有松庭園の二か所で行われていました。服部良也邸の土蔵の公開は約十年ぶりとなりました。いつも目にしてきた外観だった土

蔵に足を踏み入れますと、内部の見応えのあるつくりが印象的でした。

大改修後初めて一般公開された棚橋邸の一階では、歌川広重はじめ貴重な浮世絵が数多く展示された「浮世絵展」が江戸時代の浮世絵にみる有松絞り」が開かれました。二階ではREAL Style企画の「絞りのある生活展」があり、ランプシェード・ファブリックパネルなどのインテリアが展示されました。棚橋邸の天井には約十六・五メートルに及ぶ樹齢百五十年程の松の大敷き梁があり、その大きさは目を見張るものでした。

旧山田薬局では映像と音楽とファッションが融合した展示やきものをテーマにした「レトロフューチャーアート KIMONO」が行われました。昭和の旧薬局の姿もみられ、家族連れも昔を懐かしんでいました。

石田季実枝先生の人気の絵手紙教室は町家で開かれ、有松あないびとの会による有松まち並みツアーも随時ありました。

今回が初めてのおもてなしが多かった三日間となりましたが、かみしばい「庄九郎と仲間たち」の公演もその一つでした。有松の誕

生にまつわる話は分かりやすく、温かい筆づかいで描かれていたため、子どもたちにも親しみやすく、大好評でした。

また十七日には「トコトコ東海道宿場まちウォーク」や二周年を迎えた「有松東海道青空市」、行列ができた「舞妓さん撮影会」なども行われ、とても盛り上がりました。

有松の至る所で見どころいっぱいイベントが催され、わくわくする秋の日となりました。きもの姿で町並みを歩かれた人も多く、いにしえ旅人が有松で感じたであろう趣や美しさを今に感じ、ひと味違った秋の有松を感じられたひとときとなりました。

(文・伊藤弥生 写真・福岡友一)



## 観光ボランティア ガイド育成講座

寒風吹きつける二月十八日、第四回観光ボランティアガイド育成講座が緑区役所講堂で開催されました。この講座は、緑区内の商工会や、市民団体、区役所により設置された緑区観光推進協議会が、緑区を訪れた人にも「おもてなしの心」あふれた観光を味わってもらおうと企画したものです。有松・桶狭間・高・鳴海地区の観光ボランティアガイド、まちかど案内所、緑区観光推進協議会の構成員、みどサポ会員等、約七十名が受講しました。

今回は「話し方」講座として、講師に緑区在住のプロのアナウンサー・きくち教児氏

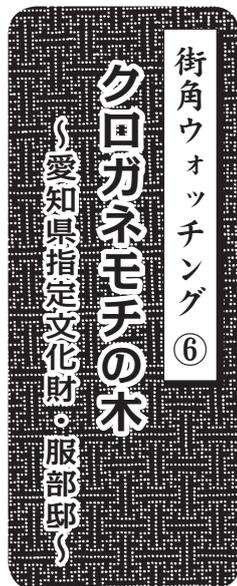


ご夫妻をお迎えしました。きくち教児氏は幅広い視野をもったパワー溢れる声の方でした。興味を持ったものをいろいろ収めた携帯カメラの写真を見せてくださりながら、

奥様との息の合ったトークを披露されました。また、健康の秘訣：体温を下げない、よく噛んで食べる、体のツボを揉む等を教えてくださり、これまでとは一味違った講演となりました。

(文・山田るり子 写真・加藤一成)

\*\*\*



東海道を歩いていると服部邸の庭にある一段と幹が太くて背の高い木が目飛び込んできます。これがクロガネモチの木です。別名を福来柴(ふくらしば)という縁起の良い名前が付いています。

常緑樹で、十数メートルの高木です。葉っぱに水分を多く含んでいることから、防火対策にもなったようです。昔から「黄金」「くるがね」といわれることから、縁起木として庭木に好まれるという面もあります。お隣の大府市では市の木として植樹されています。

大府市民の投票により決まったそうです。ところで有松・服部邸のクロガネモチは何と樹齢三百五十年以上だということです。そしてこの木には「都市景観保存樹」という呼び名があります。

もしこの木がなかったらどうでしょうか、町並みの印象も随分ちがってくると思います。太い幹のため、お屋敷の屋根がすこし控えて建てられています。

今もお天気の良い日には、青空に向かっていきいきと輝いております。前を通ったら是非ゆっくりと見上げてみてください。

この木は江戸の時代からずっと東海道路沿いに立って、有松を見ていたわけですね。有松のことを一番よく知っているのはこのクロガネモチではないでしょうか？

(文・浅野康子 写真・福岡友一)



# 有松まちづくりの会 総会

◆日時 五月十五日(木)  
十三時三十分より

◆場所 有松鳴海絞会館

◆記念講演会

講師 井澤 知旦氏

名古屋学院大学教授

◆テーマ

## 町並み研修会

◆月日 四月十七日(木)

◆行先 京都美山を訪ねます。

かやぶきの里・京都美山には江戸時代のかやぶき住居が多く見られ、平成5年12月に重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

◆会費 七、〇〇〇円

## 俳句

「春の有松」

鈴木 義光

有松やなまこ壁背に目向ぼこ  
夕暮に卯建の影や浅き春  
手越川静かに流れ水温む

## ◆主な来訪者◆

(有松あないびとの会(案内分))

- ・登録有形文化財所有会
- ・名古屋「てくてく銭湯」
- ・煌星俳句会
- ・岐阜 日タク観光
- ・ゆうゆうクラブ名古屋
- ・名古屋市立山田東中学校
- ・あま市立正則小学校
- ・半田市立乙川小学校PTA
- ・京都府教職員組合
- ・名古屋やっとかめ文化祭
- ・松阪市宇気郷公民館女性学級
- ・名古屋市青年大学健康クラブ
- ・みよし市明知上婦人会
- ・有松小学校・有松中学校地域学習
- ・神戸新聞・読売旅行東海道五十三次ウォーク
- ・愛知守山自然の会
- ・犬山小弓の庄企画運営委員会
- ・武豊町更生保護女性会
- ・扶桑町コミュニティ協議会
- ・名古屋工業大学大学院「有松ええところ探訪」
- ・名古屋市立榎小学校
- ・日興トラベル・枝垂れ梅と有松

## 訃報

竹田耕三様

平成25年11月19日ご逝去(享年67歳)

長年にわたり、会報有松の表紙の絞り柄の提供とその絞り柄の解説をしてくださいました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## 編集後記

会報有松第1号には、有松まちづくりの会が発足した当時の役員さんのお名前が見られ、素朴な印象の誌面からは当時の皆さんの手探りながら熱い取り組みの様子が感じられます。それから31年の時を経て、会報有松70号を発行できますことは、名古屋を始めとする行政の皆様、全国の有松ファンの皆さん、そして有松愛を持って、地道に活動している会員の皆さんのお陰と厚くお礼申し上げます。この会報は有松のまちづくり活動の歴史の証人です。その時々直接編集に関わってこられた先輩諸兄弟の心意気にも胸が熱くなります。

これからも皆さんの気持ちを言葉に代えて、ふるさと有松を広く多くの方に発信できる会報を目指して参ります。皆さんのご寄稿お待ちしております。(加藤明美)

企画編集(鶴飼 満・藤島繁博・長塚啓)

## 〈有松まちづくり憲章〉

私達は、先人から受け継いだ有松のたからものを守り、次世代に届けるために、この憲章を定めます。

- 一、有松の町並み・絞り・山車を守り、誇ります。
- 一、人と人がつながり、ぬくもりのある有松を創ります。
- 一、有松の歴史や物語を学び、遊び、伝えます。

有松まちづくりの会

二〇一四年三月三十一日発行 (年二回発行)

〒458-0924 名古屋緑区有松三〇一二(有松商工会内)  
TEL(052) 621-0178  
FAX(052) 622-7401